

# TILE'S ONLY ONE

2017 DIRECT SPECIAL ORDER TILE Vol.5



※ 本カタログ掲載内容及び画像・図版などの無断転載・無断使用はかたくお断りいたします。

夕-DN5-5 | 2017.6.20



sui

時として優雅に、そして個人的かつ大胆に。  
オーダータイルならではの工夫と共創が  
表現力のさらなる可能性を引き出す。

## INDEX

### INTERVIEW 1

タイルの「使い方」と「デザインアプローチ」————— 2

富川 浩史 (富川浩史建築設計事務所)

KOKO LUMINE STORE  
&Collection

### INTERVIEW 2

Tosaken+tile タイルで演出する空間デザイン — 6

本多健介、登坂貴之 (トサケン)

下北アパートメント  
HOTEL UNWIND SAPPORO  
IKAYAKI STAND

### COLLABORATION

independ™ × DINAONE ————— 10

KAMI CUP / ONE CUP

### 特別企画

身近な焼きもの・心に残る焼きもの ————— 14

塩田健一 児山寿穂 佐藤香一郎 庄司多門  
伊原洋光 富川浩史 本多健介 登坂貴之  
山下雄作 後藤晃人 川島千晶 廣田耕人  
木股 保 伊藤一成 後藤泰男 ダイナワンスタッフ

### 石材特注

Aēsop ニュウマン新宿店 ————— 22

### ORDER CASE 1

新函館北斗駅 ————— 24

### ORDER CASE 2

西南学院百年館 (松緑館) ————— 26

### やきもの大国 NIPPON

CLOSE UP [石州] ————— 28

### PICK UP POTTERY!

技に磨きをかけ続ける工房 vol.1 ~泰青庵~ ————— 32

## 建築家 富川 浩史さん(富川浩史建築設計事務所)に聞く タイルの「使い方」と「デザインアプローチ」

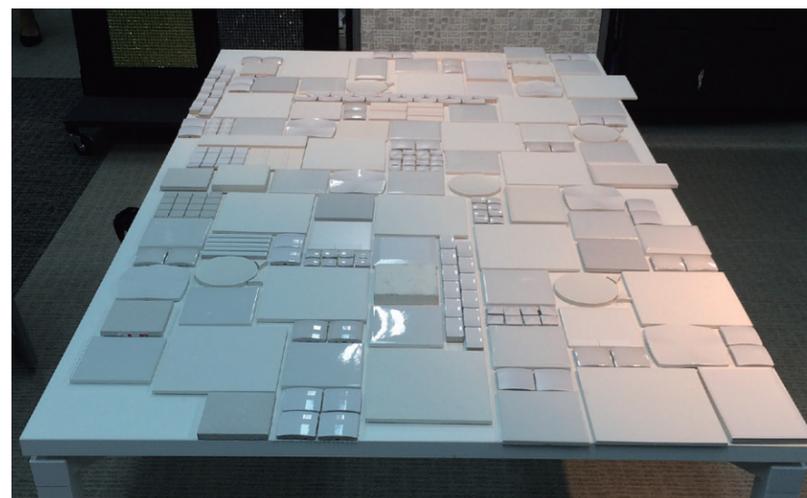
建築設計から、商業店舗を中心としたインテリアデザインまで、国内外を通して幅広く活躍されている建築家の富川浩史さん。対象的なタイルの使い方をされたKOKO LUMINE STOREと&Collectionについてお話を伺った。



## KOKO LUMINE STORE

パターンが存在しない  
新しいタイルパッチワーク。

店舗壁面は、近づくと解像度が上がるようなイメージ。お店の外から見ると単一の白い壁が、店内に入ると実はたくさんの形状のタイルで構成されている、というような新鮮な驚きを感じさせる、ユニークな壁面です。これは女性をターゲットに日本中から良いものを集めているKOKO LUMINE STOREの商品構成を、同様にメイドインジャパンの様々な白いタイルのパッチワークで表現したかたちです。これまでライン使いや規則正しいパターンのパッチワーク的な使い方はやりましたが、今回のように本当にランダムに配置された使い方は日本ではあまりないと思います。



ダイナワン展示室での配置シミュレーション風景



タイルの施工風景 目地詰めの有無でイメージが異なるのがよくわかる

“人の手によってつくられた  
タイル壁”を見事に表現。

この壁面をデザインする上でこだわったことは、“人の手によってつくられたタイルの壁”を表現すること。さまざまな大きさ・形の白いタイルをダイナワンのショールームでランダムに並べ、イメージづくりを行った後、サンプルを制作。目地なしの状態ではグリッド感が強い印象でしたが、目地を入れて落ち着きある柔らかな表情に仕上げようと思いました。

現場では、当初ある程度の範囲でパターンは設定したものの実際は現場の即興に近い形で自由に施工しています。タイル割をしない、タイル間の隙間(目地)はそのまま活かす等、あえてセオリーを崩したタイルの使い方を意識しました。

上記の通り、この壁にはある程度の基本はありますが、一つとして同じパターンはないんです。そのためそれ程多くない面積の壁面ですが、施工には手間がかかっています。施工してくれた方々に感謝しています。



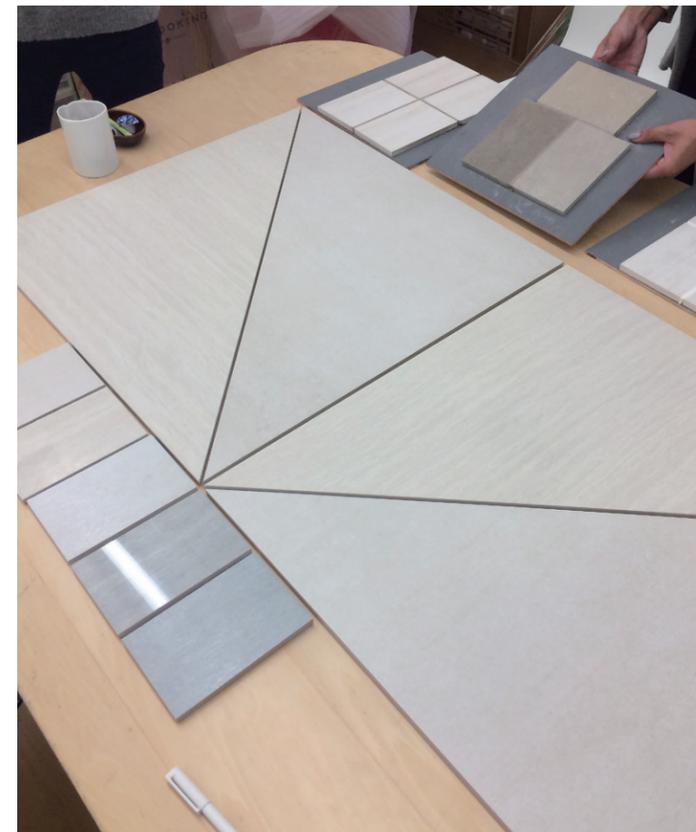
## &Collection

絵画のコンポジションをベースに  
緻密に計算されたタイル割

ポップアートの絵をインテリアの一部として販売するライフスタイルストア「&Collection」では、絵画には必ず存在するコンポジションからヒントを導き、タイル割によってグリッド感を持たせた床と大和比を取り入れた壁面の格子をデザインの軸に寸法や比率もいねいに変えて表現しています。



目地詰め前のタイル施工風景



600角タイルを実際に対角でカットして行ったマテリアル選定

什器を含めた空間全体を  
デザインコントロール。

また、什器もタイル床の面パターンに合わせて同様の比率で制作。壁面のフレームワークが什器を含めて空間全体のデザインコントロールをしています。

&Collectionでは600角の大判タイルがベースですが、同系色の4種類のタイルを使用し、対角にカットした三角形もパターンに組み込みました。

タイルは既製品でも、少し手を加えることでデザインコンセプトに合せた使い方や表現ができると考えています。



テーブルの脚もタイルの形状と同じデザインを用いた



チームプレーの大切さ。

あえてタイルの割付をしなかった「KOKO LUMINE STORE」、対照的にきっちりタイル割をした「&Collection」。どちらもプロジェクトに関わる方全員とのイメージ共有からスタートしています。メーカー、施工業者、タイル職人との連携によるチームプレーがこれからの空間づくりやタイルをはじめとしたマテリアルの活用方法に大切なことだと思います。

# Tosaken + tile

## タイルで演出する空間デザイン

2012年の事務所設立以降、飲食やホテルのデザインを中心に活躍する本多健介さんと登坂貴之さんが率いるトサケン。  
日頃から、空間に馴染ませるようにさり気なくタイルが使われているお二人にタイルの持つ素材としての可能性と、これまで手掛けられたプロジェクトを通してその狙いや手法について語って頂いた。

これ程に人の手作業で作られる素材で魅力的なものは他にはないと思っているくらいタイルが好きです。時には冷たく、時には暖かく、他の素材と組み合わせることで様々な表情を演出することができます。それはやはり人の「手」というものが大きく関わっているからだと思っています。焼く時の一手間、釉薬を塗る時の一手間、そのつくり手の思いが素材に表れていて、使い方でいろいろな表情を見せてくれます。これからも様々なタイルを、つくり手の思いと一緒に空間の中に取り入れていきたいと思っています。

タイルを使用する際には他の素材との組み合わせや配列の方法などにアイデアを組み込んで、空間に合った個性が生まれる事を目指しています。  
既製品でありながら様々な表情を作る事が出来るタイルは奥深い素材だと思います。



デザイナー  
**本多健介**  
Honda Kensuke  
1982年 広島生まれ東京育ち  
2006年 武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒業  
2006年 カフェ・カンパニー株式会社入社  
2012年 株式会社トサケン設立



デザイナー  
**登坂貴之**  
Tosaka Takayuki  
1978年 群馬生まれ東京育ち  
2005年 デザインファーム建築設計スタジオ卒業  
2005年 カフェ・カンパニー株式会社入社  
2012年 株式会社トサケン設立



## 下北アパートメント

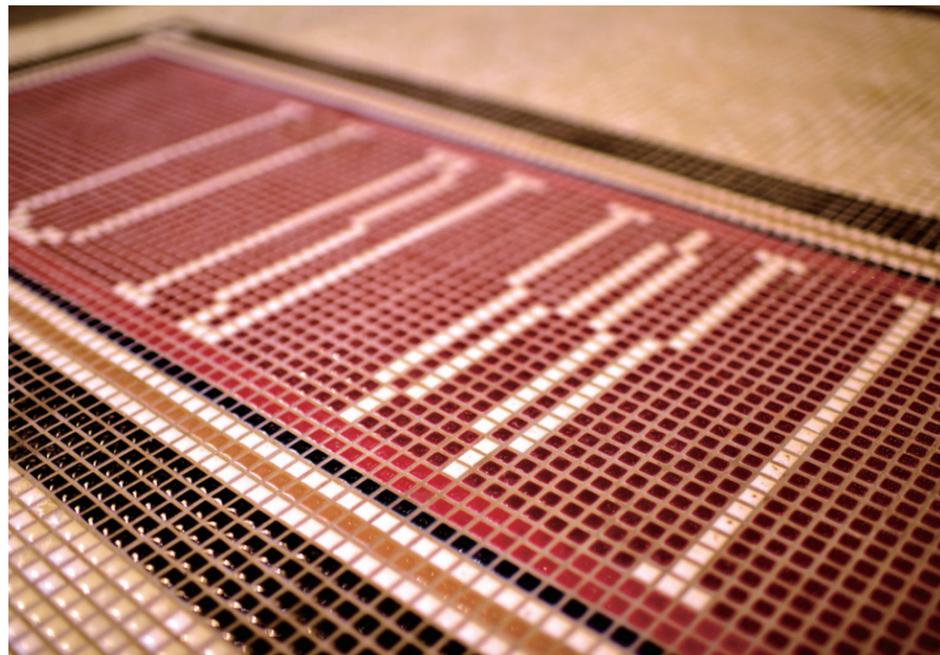
### 温かみのあるクラフトサイン(文字タイル)

グラフィックデザイナーがレタリングで描き起こしたロゴを、サインでも手の温かみのある質感を表現する為に手作りの文字タイルでサイン製作を依頼しました。初めての試みだったので何度もサンプルを製作して頂き、試行錯誤を重ねる事でイメージに近い仕上がりを実現する事が出来ました。

## HOTEL UNWIND SAPPORO

### 様々な表情を生み出す モザイクタイル

「ロッジの非日常感と自宅感をホテルで」というコンセプトのもと、2017年2月にオープンしたホテルです。1Fロビーの床全面にレイアウトに沿ってパターンを施したモザイクタイル。様々な素材で暖かみを表現するべく、冷たくなりがちなタイルという素材から如何に暖かみを演出するか。タイル独特の手の温もりや釉薬のムラなど「人の手業」が感じ取れるように、細かな部分で色合いを変え、均一にならず、人が滞在する角度によっても見え方、感じ方が変わるように意図しています。タイルを通して温もりを感じれるよう、1つ空間の中に様々な表情が生まれるようなデザインを目指しました。



## IKAYAKI STAND

### ひと手間加えた シンプルな100角タイル

いか焼きに現代的な感性を取り入れ、新しいスタイルで提供するフードスタンド。波や風から発想した波型のモチーフを様々な素材で取り入れ、楽しさのある空間を目指しました。カウンタータイルでは100角タイルをカットする事でモチーフの表現をしました。一般的に使われてきた100角タイルに、少しのアイデアを入れる事で新鮮な見え方が生まれたと思います。



# independ™ × DINAONE

2016年DINAONE展示会で特別企画展として発表し、好評をいただいた紙コップとワンカップ。  
この企画は株式会社船場 佐藤香一郎氏が主宰する、ウェブメディアindependとのコラボレーションから生まれました。  
私達の持つ作り手のネットワークと技術、モノづくりへの想い  
そしてindependのクリエイティブな視点での遊び心とこだわりが  
新しい焼き物の魅力の発見につながり、この2つのCUPに辿り着きました。



NOT PAPER  
BUT CERAMIC  
KAMI CUP

## independ™

「インディペンド」は株式会社船場プロジェクトディレクター佐藤氏が主宰するウェブメディアであり、あたらしい価値を創造したり発見したりする「バリュー・クリエイション・プロジェクト」のハブ機能として活用している。メーカーの唯一無二の技術に着目し、切り口を変えることで新しい価値を見出す活動をリリースしている。今回はダイナワンがもっている焼きものの最先端の技術を応用した価値観をプロトタイプ化した。「インディペンド」は株式会社船場が主な業務としている空間・商業施設のデザインに止まらず、モノ・商品のデザイン、活用も含めてサポートできるシステムとその体制を構築しようとしている。



佐藤香一郎  
Sato Koichiro

株式会社 船場  
開発事業本部 SC総合開発研究所  
プロジェクトディレクター  
Project Director  
日本商環境デザイン協会会員  
日本マーケティング学会会員



NOT GLASS  
BUT CERAMIC  
ONE CUP

「NOT PAPER BUT CERAMIC」として表現した、紙コップデザインの陶器のカップ。紙コップと思い手に取ると、その重みと質感にちょっと驚かされる、そんなユニークさが面白い。ダイナワンには、折り紙状の紙で焼くと陶器として固まる「陶紙」というプロダクトがあったので、まずはこれを生かせないかと考えました。折鶴ならば、紙が重なった部分で溶けて固まり強度を作れましたが、紙コップの場合は薄くなりすぎて非常にもろいものに。今のカタチにするため、何度も試行錯誤を重ねました。



紙

陶器製プロトタイプ



ガラス

陶器製プロトタイプ

「NOT GLASS BUT CERAMIC」として表現した、ワンカップの陶器。画期的で、日本酒の飲み方にバリエーションを生んだ優れたプロダクトの一つですが、今回はなぜガラスなのか?というところからスタートすることに。日本には、焼きものの種類や産地がたくさんあり、それぞれのお酒に合った器が用意できるのではないかと考えました。無機質でシンプルなフォルムはもちろん、このままでも家庭で使えるグッドデザインに。ワンカップのキャップで蓋ができるため、キャニスターとしての機能も望めます。

遊び心とこだわりが表現されたディテール



紙コップとは違う、重みや手に馴染む質感が面白い。



紙コップの継ぎ目も再現し遊び心をプラス。



外側は無釉、内側は施釉と汚れが付きにくい仕様。



指から滑り落ちないぐいれ具合が「乙」なデザイン。

今回ご協力いただいた、株式会社船場の佐藤氏と製造現場を巡りました。



紙コップの成形型と製作風景。紙コップは紙の質感、手触りを意識し且つ熱いコーヒーを注いだ時の温度を意識して陶器質(土もの)で製作。成形方法も鋳込み成型ではなく動力成形で量産にも対応。

製作を依頼した愛知県瀬戸市の五春窯さん。



磁器質の洋食器製造が得意な五春窯とは別の工場。素地の白さを求める場合、磁器質を選択すると良い。写真は鋳込み成型中の風景。複雑な形状やデザインも快く引き受けてくれる数少ない窯元。



土岐まで足を運んで見学したアトリエの窯元にはほとんどが自作という金型がビッシリ並ぶ。



工場の試作品を見ながらまた新たなアイデアが浮かぶ佐藤氏。

# 身近な焼きもの・心に残る焼きもの

「日本人のDNAには焼きもの文化が根付いているはず」との想いからスタートしたこの企画。  
建築家、デザイナーをはじめ、モノづくりに関わる業界で活躍する方々の  
愛用の器や心に残る焼きものある風景を教えてくださいました。



写真提供 / レーベルクリエイターズ

## 陶器の湯呑み「CASANE」

陶器の湯呑み「CASANE」を自宅で愛用しています。ザラツとした手触りの良さ、手に馴染む珍しい形状、存在感あるツートンカラーが気に入っています。「取っ手」が付いていないため、手で器全体を握って飲むことになります。だからこそ、てのひら全体で陶器の感触を味わうことができ、不思議とゆったりした時間が流れ始めます。最近はこの器でルイボ스티ーを飲みながら、「次はどんな特集を企画しようかな」と妄想する時間が日々の楽しみです。



## 塩田健一

Shiota Kenichi

「月刊商店建築」編集長

2006年より「月刊商店建築」編集部所属。カフェ特集など毎月の店舗取材を担当する他、「コンバウト&コンフォートホテル設計論」「CREATIVE HOTEL & COMMUNICATION SPACE」など増刊号も制作。



## ローワーマンハッタンの煉瓦の建物

まだ学生だった頃、初めてニューヨークに行った時、ハーレムやローウーイストはかなり危険な地域と言われていて不穏な独特の雰囲気がありました。そして、そういうエリアは建物が煉瓦だったのが印象に残っています。むき出しの煉瓦と鉄のコントラストは力強く見えましたし、これぞニューヨークという魅力を今でも感じます。

## 佐藤香一郎

Sato Koichiro

株式会社 船場

株式会社 船場  
開発事業本部 SC総合開発研究所  
プロジェクトディレクター  
日本商環境デザイン協会会員  
日本マーケティング学会会員



## 庄司多門

Shoji Tamon

カーデザイナー TAMONDESIGN

1994年 (有)RE雨宮在籍 ショーモデル、レーシングカー製作を手掛ける  
2001年 (株)TAMONDESIGN設立  
2015年 ダイハツコペン サードパーティ「COPEN400TDC」発表

## ふらっと行って買った信楽焼

僕は、創作時に気分転換にふらっと信楽に行って焼きものを見るのが好きです。ある日お店に入った時、「君は、焼きものの善し悪しがわかるのか?」と挑発的に言われた時があって、僕は「わからないです教えてください」と言いました。その答えは「しっとり感や、食べ物でも、髪の毛でも、女性でもしっとりしているのは良いもの。焼きものも一緒」ということです。創るモノは違えども、同じ造形をする人間として、確かにわかる気がしました。僕もカタチを造形する時に気を付けている感覚でもあるからです。でも信楽焼では「自然美」のチカラ強さと「侘び」の高い精神性を感じる世界観が好きです。



## これまでに製作したサンプルの数々

写真はこれまで製作してきたサンプルの一部。特注ものを扱うことが多く毎回違う形や色を製作していく為これまで携わったものはどれも思い入れがありますね。基本的になんでも作ってしまうので自分の作品が好きです。



## 兎山寿穂

Koyama Juho

ケラモスアート

1970年生まれ  
1998年よりケラモスアートで製作活動に参画し、今日に至る。主に陶壁、オブジェ、特注タイルの制作や明治、大正時代の装飾タイル(テラコッタタイル)の修復などを手掛ける。



### 南青山で見つけたCup and Saucer

数年前に南青山で購入した、Cup and Saucer 5客。女性店員さんからは、「手作りで、一つひとつ微妙に違うので、味わいがありますよ」というお話をいただきましたが、自宅に帰って並べてみると・・・どうやら同じ型で作られたもの?のようです。絶妙な造形と釉薬の扱い方によって、手作り風と量産を可能にした(と思われる)このアイテムを家族で気に入って使っております。

### 伊原洋光

Hiromitsu Ihara

hm+architects 一級建築士事務所

1973年 愛知県生まれ  
1998年 愛知工業大学大学院  
博士前期課程修了  
1998~2015年 第一工房  
2015年~ 愛知工業大学非常勤講師  
2016年~ hm+architects 一級建築士事務所  
共同主宰  
2016年~ 中部大学非常勤講師  
2016年 第48回中部建築賞受賞



### 中国カシュガルの近郊にある豪商の館

写真は独立した年に訪れた中国カシュガルの近郊にある豪商の館の写真です。中央アジアでは日干しレンガをはじめとする、土地の土を使った建材で建物がつくられており写真の焼き物の壁面はこの土地としてはとても贅沢な装飾で、無くても生きていくには困らないものなのですが、長い時間を生きて土地に根差した建築と生活文化と素材の関係とはこういうもののだと理解した記憶があります。



### 富川浩史

Tomikawa Hiroshi

富川浩史建築設計事務所代表

1976年東京生まれ。武蔵工業大学(現東京都市大学)大学院修士課程終了。手塚貴晴+手塚由比/手塚建築研究所を経て、2005年建築設計富川浩史/SIESTA設立(2009年合同会社富川浩史建築設計事務所へ改組)。代表作に「みゆきの家」[Samantha Thavasa]の一連の店舗。GOODDESIGNAWARD、SDA賞、JCD AWARDなど、受賞多数。2013年より東京都市大学非常勤講師。



### Echo Park Potteryのマグ

Peter Shireが主宰するEcho Park Potteryのマグが昔からとても好きです。オールハンドメイドなので、形や色など同じものが一つとない事もそうですが、食器というカテゴリーだけでは取まらない、ファッション的な匂いを醸し出しているのも魅力の一つかもしれません。



### 本多健介

Honda Kensuke

トサケン

1982年 広島生まれ東京育ち  
2006年 武蔵野美術大学空間演出  
デザイン学科卒業  
2006年 カフェ・カンパニー株式会社入社  
2012年 株式会社トサケン設立



### 鮮やかな青色の益子焼

様々な作家の作品に出会える益子の陶器市に毎年通っていました。このお皿は東京で出会ったものですが、深みのある鮮やかな青色と、一つ一つ異なる質感が魅力的な益子焼の作品です。シンプルでありながら、程よい存在感で生活に馴染んでいるお気に入りの焼物です。



### 登坂貴之

Tosaka Takayuki

トサケン

1978年 群馬生まれ東京育ち  
2005年 デザインファーム建築設計  
スタジオ卒業  
2005年 カフェ・カンパニー株式会社入社  
2012年 株式会社トサケン設立



### コペンハーゲンで見つけた花瓶

旅行で訪れた際に、デンマーク・コペンハーゲン市内の蚤の市で見つけた1970～80年代頃の Royal copenhagen の花瓶。柔らかく豊かな色彩と、職人による手仕事の温もりが感じられるところに魅かれました。



### 山下雄作

Yamashita yusaku

パン職人  
Boulangerie Yamashita

Boulangerie Yamashita  
(ブランジェリーヤマシタ)  
神奈川県中郡二宮町二宮1330  
0463-71-0720  
<http://www.boulangeryyamashita.com>



### 波佐見焼のピンブローチ

波佐見焼のピンブローチ。長崎の島で生まれた主人との結婚祝いに贈られたもの。留める指先に集中する時、心の波風を風に変えてくれるスイッチです。ゆらぎのある青は、街の暮らしに島を思う時を与えてくれます。

### 川島千晶

Kawashima Chiaki

住宅作家

1974年、東京生まれ育ち。1991年より小井田康和氏に師事。氏のアトリエに通いながら、東京大学・同大学院修士課程にて都市建築史を専攻。2009年、独立。設計室ちあきにて、年にひとつの木の家を作る暮らしを続けている。



### 豪徳寺の招き猫

東京・世田谷区にある豪徳寺は、招き猫発祥の地といわれています。豪徳寺内にある招き猫殿には、願いが成就したお礼としてたくさんの招き猫が奉納されています。その陶器でできた素朴な白い猫たちに私も招かれます。



### 後藤晃人

Goto Akito

フォトグラファー  
ゴトウフォトオフィス

1971年生まれ  
住を中心に広告、雑誌などの撮影を行う。

### グスタフスベリの カップ&ソーサー

スウェーデンの陶磁器メーカー・グスタフスベリのカップ&ソーサー。新婚旅行でスウェーデンのグスタフスベリ陶磁器博物館を訪れた際に館内のアンティークショップで馬車の絵柄に一目惚れして購入しました。北欧は他にもデンマークのロイヤルコペンハーゲンやフィンランドのアラビアといった世界的に有名な陶磁器メーカーがあり、どの国を訪れても素敵な陶磁器に出会えるのがとても印象に残っています。



### 廣田耕人

Hirota Tahito

オーダー家具・オーダーキッチンメーカー  
Basis代表

世田谷区等々力にある小さなお店で主にエンドユーザー向けにオーダー家具やオーダーキッチンをご提案しております。  
[www.basis-orderfurniture.com](http://www.basis-orderfurniture.com)



ひょうたん型の花瓶

32年前に自分でロクロをひいて作ったもの。当時、初めて大型の陶器に挑戦してキレイな色・形で嬉しかったのを覚えています。その後の焼き物歴32年の目で改めて見てみると「全然ダメだな〜」と感じます(笑) 想いでの陶器です。

木股 保

Kimata Tamotu  
立風製陶株式会社



ガスレンジ用の  
陶製目玉焼き器

幼少より瀬戸市赤津焼の窯場が遊び場で自然の流れで土と触れあい沢山の陶器や焼き物を身近に感じてきました。その中でも高度経済成長時に量産されたガスレンジ用の陶製目玉焼き器は高い技術力と革新的なアイデアで今でも良く覚えてます。当時のようにこれからもセラミックの力が生活の柱となるようにと思うこの頃です。

伊藤一成

Ito Kazunari  
品野セラミックタイル工業株式会社



平野一博

Hirano Kazuhiro  
ダイナワン 営業部

陶器でつくられた美しい千羽鶴

長崎原爆資料館内に設置されている焼き物で作られた千羽鶴です。“焼き物”は破壊がなければ半永久的に劣化しない素材です。そんな素材で製作された千羽鶴が戦争の無い平和を願う建物にあるということに何か繋がりをもたせたのではないかと勝手ながら感じました。



美しい色彩が魅力の  
イスラームのタイル

モザイクタイルの美しい色彩と複雑な幾何学模様は無限性を表しており、タイルの耐久性と相まってより強くその意味を感じます。タイルと言われて最初に思い浮かんだのがイスラームのタイルで、入社のおかげです。

菅沼里枝

Suganuma Rie  
ダイナワン 企画部



宮澤賢治「注文の多い料理店」の一節

「二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なものです。」とは、立派な料理店であることを瀬戸の煉瓦を使っていることで表現したものと思います。写真は、「志野釉菱重ね文敷瓦」で江戸時代中期に瀬戸で焼かれたものです。平安時代からの焼き物の町である瀬戸のブランド力は、大正末に書かれた賢治の童話の中でも活き活きと使われていました。

後藤泰男

Goto Yasuo  
株式会社LIXIL 広報部



ニューヨークの  
地下鉄での施工風景

ニューヨークの地下鉄のホームで見かけた3×6インチのタイル施工風景。仮囲いも何もなく、施工途中むき出しのまま放置されている雰囲気GOOD！職人も若く日本とのタイル文化の違いを感じたシーンでした。

中村至孝

Nakamura Yoshitaka  
ダイナワン 企画部



ARABIAのRUSKAと  
ARCTICA

日々の食卓で使用しているARABIAの食器。RUSKAのカップはその落ち着いた佇まいと重厚感、ARCTICAの食器は柔らかな乳白色の釉薬の質感と、どんな食事でもしっかりと引き立て役に徹するそのシンプルな姿が、何年たっても魅力的に感じます。私にとって「お気に入りの白いシャツ」のような存在です。

皆藤 浩

Kaito Hiroshi  
ダイナワン 営業部



たばこ屋さんがある  
懐かしい風景

幼少の頃、駄賃の小銭をもらい、使いに走った たばこ屋さん。「角のたばこ屋さん」という言葉を聞かなくなって久しいが、消えかける昭和の風景の代表格とも言えないだろうか？隣り町しかり、そこには彩とりどりなモザイクが散りばめられ、タイルを使うことが街の中心に求められた必須アイテムであったことがわかる。そんな懐かしい風景を思い返しなが、次の時代に求められるタイルの役割を考えさせられた。

村山弘二

Kouji Murayama  
ダイナワン 企画部

# Aēsop ニュウマン新宿店

機能が集約された  
108ピースのライムストーン。

## 機能によって変化する造形

壁で囲われていなくても、店舗を周囲から視覚的に独立させるため、存在感のある素材としてライムストーンを主役に全体を構成した。全体が一つの大きな塊から削り出されたかのように、床、柱、什器が立体的かつ温かみのある素材によって仕上げられている。店舗空間を3次元グリッドの目地によって分割し、108ピースの石をそれぞれの場所へと貼り込んでいった。柱と一体となった大きなシンクカウンターは、ひな壇状の商品棚、くりぬかれたシンクといったように、機能にしたがって彫刻的に形づくられ、ライム石の優しい色が背景となってイソップ製品の琥珀色のパッケージを引き立たせる。多くの人が行き交う場所の中にあっても、石という単一素材の持つ重厚感によって、イソップのブランドイメージを際立たせる店舗を目指した。

(株式会社トラフ建築設計事務所)



施主 / イソップ・ジャパン株式会社  
 設計 / 株式会社トラフ建築設計事務所  
 施工 / 株式会社アドエス  
 特注石材 施工協力 / 株式会社ダイナワン  
 床: パサモタル下地ライムストーン貼り  
 什器: ラウン材ランバーコア合板下地ライムストーン125貼り

### 物件担当スタッフ



ダイナワン 営業部  
小杉和正  
Kosugi Kazumasa



ダイナワン 工務  
西潟 聡  
Nisigata Satoshi

# 新函館北斗駅

2016年3月の北海道新幹線開業により渡島大野駅から「新函館北斗駅」と改称され、北海道最北端の新幹線駅舎(札幌駅延伸まで)として、また、新たな北海道の玄関口としての役割を持つ駅舎として、構想から約20年近い年月を経て完成した、まさに道民念願の新幹線が開業された。北海道の基幹産業の主軸である観光の観点から、道外からの新しい観光客需要の増加に伴う北海道PRの拠点としても機能するこの駅舎には、北海道の持つ歴史・文化性の象徴としてのイメージが必要と考えられた。

## アイヌ文化の継承

道外からの来訪者に対して北海道におけるアイヌ文化の一端を紹介する資料として、『夷酋列像』(いしゅうれつぞう)という、蠣崎波響(松前藩家老)が描いた北海道東部や国後島のアイヌの有力者をモチーフに描いた連作肖像画を展示することが検討された。

この作品は長い間行方不明だったが、時を超えフランス：ブザンソンの美術館で見つかった幻の名画と言われている。アイヌの12人の有力者たちが、細密な描写や色彩鮮やかな色使いにより描かれ、当時の天皇にも称賛された波響の傑作である。

## 絵画の再現性の難しさ

この展示において、見る人々に感動を与える細密な描写や鮮やかな色使いをいかに再現できるかが検討されたが、焼物・陶板での色彩表現(特に朱色系)では再現性が難しく、全体的に色褪せた色彩表現になってしまうこと、又、絵画の持つ迫力を表現するため、最大限継ぎ目のない大判一枚物への転写が必要なのが問題に挙げられたが、様々な手法を検討した結果、最も再現性の高い大判セミックパネルLAMINAM(ラミナム)へのインクジェットプリントによる描写が最も再現性が高いとの結論に至った。度重なる現物へのプリントサンプリングと、原画データとのマッチング調整を行い、コストメリットの面も含め、原画の持つ細密な描写と鮮やかさを表現することに成功した。



繊細なプリントサンプリング作業による濃淡の色調整。



新函館北斗駅全景



時間の経過を感じさせる加味の質感まで忠実に描写されている。

## 大判セラミックタイルの魅力

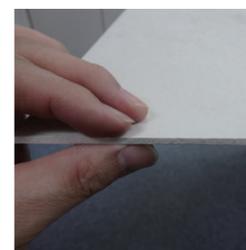
一般的なセラミックタイルへの転写・施工を考えた場合、従来では大判といっても600mm~800mm角程度の1枚ものとしてのサイズの制約がある中、今回採用した「プリントプラス」では最大3m×1mという大判規格のセラミックパネルへの転写が可能である上、今回のように40×30cmという小さな原画を最精密なスキャナー技術により大判に引き伸ばしても、原画の持つ繊細なタッチを損うことなく、髪の毛やヒゲの1本1本を表現しており、今回の600×1200の12枚並列展示においては非常にマッチングした。絵画からのイメージ転写という、いわば忠実な複製作業を行うにあたり、その作品のもつ空気感や見る人へ与えるインパクトまで含めた再現に寄与した製品といえるであろう。



「夷酋列像」を複製したセラミック陶板

## 現場での搬入・施工について

現場搬入・施工においては3.5mmの薄いセラミックプレートの扱いにおいて注意は必要だが、新函館北斗駅は、仮設的に在来線が運行していた背景があり、薄いセラミックプレートという搬入性・施工性含めてメリットの高い材料といえる。



ベースとなった3.5mmの陶板

## 新函館北斗駅のこれから

この展示において、見る人々に北海道の歴史・文化を感じ、新しい北海道の玄関口でのイメージPRにも寄与できる空間が構成できたと感じている。これから駅を利用する人々がこの「夷酋列像」を見て・感じてそして道南から道内へ観光の輪を広げていくことを切に願う。

監修：株式会社 二本柳慶一建築研究所 佐藤喜彦  
施工：株式会社 森川組

寄贈：函館ロータリークラブ、森ロータリークラブ、長万部ロータリークラブ、七飯ロータリークラブ、函館亀田ロータリークラブ、函館セントラルロータリークラブ、函館東ロータリークラブ、江差ロータリークラブ、函館北ロータリークラブ、松前ロータリークラブ、函館五稜郭ロータリークラブ、北斗ロータリークラブ

# 西南学院百年館（松緑館）

## 創立100周年を永久に憶える

西南学院は2016年に創立100周年を迎えたキリスト教を教育の基本理念とする学校法人である。今回計画した西南学院百年館（松緑館）（以下、松緑館）は西南学院大学東キャンパスに位置する創立100周年を記念した建物である。W.M.ヴォーリス設計のジョージアン・コロニアル・スタイルの煉瓦積みの大学博物館を中心とし、キャンパス軸に沿って各建物が規則的に配置されている。各建物は松緑の背景として重厚で西南学院の歴史を伝える煉瓦とコンクリート打放しによって構成されており、キャンパス全体を統一するデザインコードとなっている。

### 煉瓦の重みを表現する

煉瓦積みの良さは、煉瓦そのものの重量感が見る者に伝わることによって重厚感を意識させることではないかと考えた。タイル15mmの厚みに対して、その重量感をタイルによってどう意識させるのか、その答えはタイルの色や表情だけではなく、目地材の表情であるとの結論に至った。煉瓦の重みによって目地材がはみ出したような表情の再現を行うため、目地詰めは一本目地を採用した。タイル面よりも突起した細かい目地砂の粒子を、半乾きの段階でブラッシングによって欠落とし、目地材のゴツゴツとはみ出した表情の再現を行った。ブラッシング材料の選定から、荒らす度合い、欠落とす力の入れ方等、特注ならではの対応が職人泣かせの現場であった。



ブリックモルタルの欠落と仕上げ



西南学院百年館内部から眺める。右正面が既存建物。

撮影: harigane yosuke



既存輸入煉瓦の豊かな表情



煉瓦の表情を再現する為、職人により1枚1枚丁寧に仕上げられる



国内にて再現された煉瓦タイル



西南学院百年館全景

撮影: harigane yosuke

### 煉瓦をタイルに置換する

この重厚な煉瓦は、ベルギー産オールドウェルイン、パストラールの2種類と、イギリス産アートバリーレッドマルチを混ぜ合わせた色味と表情に趣がある煉瓦を採用しており、西南学院のシンボルとしての役割を果たしている。今回の松緑館においては、新たな100年へ羽ばたき、後世へ建物を伝承する意図を含め、より安全性の高い弾性接着剤張りを採用し、特注タイルの製作を行った。タイル製作においては自ずと既存煉瓦の豊かな表情と温かみのある3色（赤系2色、黒系1色）をどう表現すべきかに力点が置かれた。

### 煉瓦の表情を再現する

煉瓦は型に入れこんだ粘土を含む材料を焼成、もしくは圧縮し作り出される。型そのものの素材感と型から抜き出すことによって生まれる表情により、手仕事そのものが表れた材料とも言える。今回の特注タイルは、赤系生地をベースに還元焼成を行い、焼成工程によって生まれた自然な色幅によって既存の赤味の2色を再現し、窯入れ前の乾燥させた赤系生地のタイルにカーボン（墨の粉）を擦りつけつけることによってアンコ模様（黒味）を再現した。またタイル成形後にハンドメイドによって表情豊かなテクスチャーを付加した。表面に傷を付け、粉を振りかける等、職人の手作業が1枚1枚に表現されており、煉瓦同様、同じものは2つとない西南学院ならではのタイルをつくり出すことができた。

### 5者の協力が想いを実現させる

2016年3月の竣工以降、「煉瓦積みの良い建物ができ」と口を揃えて喜ぶ姿があった。煉瓦からタイルへの置換という課題に対して、設計者・施工者・現場職人・メーカー・製作者の5者が協力し、配合比率、焼成方法、テクスチャー、目地詰め方法を含め、多様な検討を顔を突き合わせて行うことによって、発注者の想い・要望を実現させることができた。ヴォーリスから始まる煉瓦建築への想いを煉瓦タイルへと置換し、それを素直に実現できたことを嬉しく思うと共に、関係者に対して深く感謝をしたい。

株式会社佐藤総合計画 前田直孝



繰り返し実施された試作品の確認

やきもの大国 NIPPON

# CLOSE UP [石州]

クローズアップ セキシユウ

## 北前船によって 全国各地へ運ばれた石州瓦

江戸時代中期、河村瑞賢によって開発された西廻り航路、いわゆる「北前船」。春に大阪～瀬戸内海、下関を経て日本海を北上し、山陰・北陸・東北に入港しながら初夏に蝦夷の松前に至る往路であり、初秋に松前を立った後、晩秋に大阪へと帰港するという長い航海でした。ただ物資を運ぶだけではなく、立ち寄る各地の港で商いを繰り返し、一回の航海で巨大な富を生み出したとも伝えられています。石見からは、石州半紙や巨大な水瓶「はんどう」、そして石州瓦が全国各地へと移出されていました。



世界遺産石見銀山のある島根県大田市大森町



益田歴史民俗資料館



出雲大社の真裏に位置し、天然の良港を持つ集落

## 400年もの間、進化し続けてきた石州瓦。

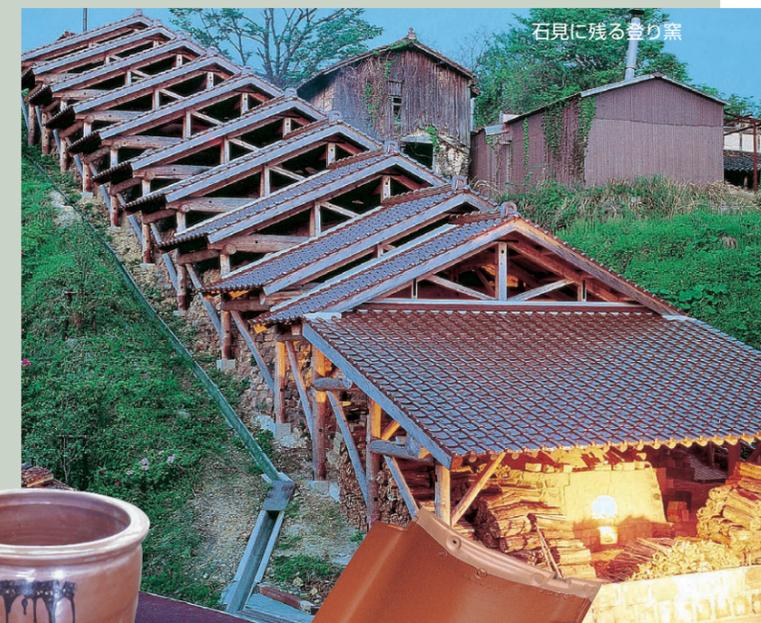
約400年前、浜田城の瓦からスタートした石州瓦。山間部は雪深く、海に面した町は日本海の荒波にさらされ、しばしば台風の通り道になるほど厳しい石見から生まれました。現在でも島根県西部の石見地域で生産され、全国第2位の生産力を誇る地場の伝統産業の一つに。地産の代表的な素材として、最も素朴さの残った焼きものであることや、個性的な風合いが魅力です。



瀬戸内屈指の港湾町 玉島

## 懐かしい赤瓦のある風景が郷愁を誘う。

石州瓦伝統の赤瓦の誕生には、耐火度の高い良質な陶土の他にもう一つ、来待という釉薬が欠かせません。約1400万年前に形成された凝灰質砂岩の来待石から採れる来待釉薬は、耐火度が極めて高く、丈夫で美しいのが特長です。また、都野津層と来待石のコラボレーションで生まれた石州瓦の見事な景観を残すのが、2007年世界遺産に登録された石見銀山の鉦山町である大森地区。耐久性に富む石州瓦によって200年守られてきた景観であり、山の緑に映える赤褐色の瓦屋根が整然と並ぶ風景は、美しくもどこか懐かしい気持ちを呼び起こします。



石見に残る巻り窯



来待石



石見のはんどう  
(水瓶)



石州来待瓦

原土処理から成形、そして焼成まで、石州瓦は今も、一枚一枚丁寧に作られています。

製造風景から石州瓦の特徴を解説



原土処理・土練り

粘土を練るときに熱を加え、芯から水分をカット。加熱式真空土練機の働きで、後の行程がスムーズになります。



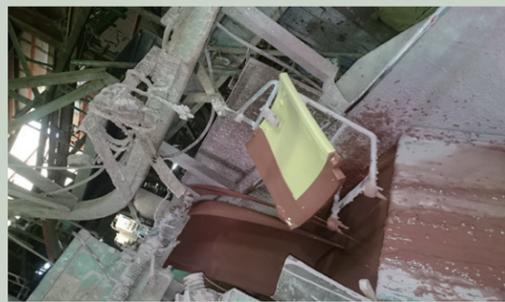
成形

瓦の形をつくるラインでは、正確な寸法の瓦が1枚1枚、形作られています。



乾燥

成形された瓦は、形に狂いが生じないように注意しながら乾燥されます。



施釉

石州瓦の特長は釉薬をかけて焼くこと。独自に調合した釉薬は、防水効果にも定評があります。



焼成

LPガスの使用で焼成温度1200℃以上の高温を実現。これによってできた強固なガラス質が、石州瓦独特の強さと美しさを守っています。



窯出し

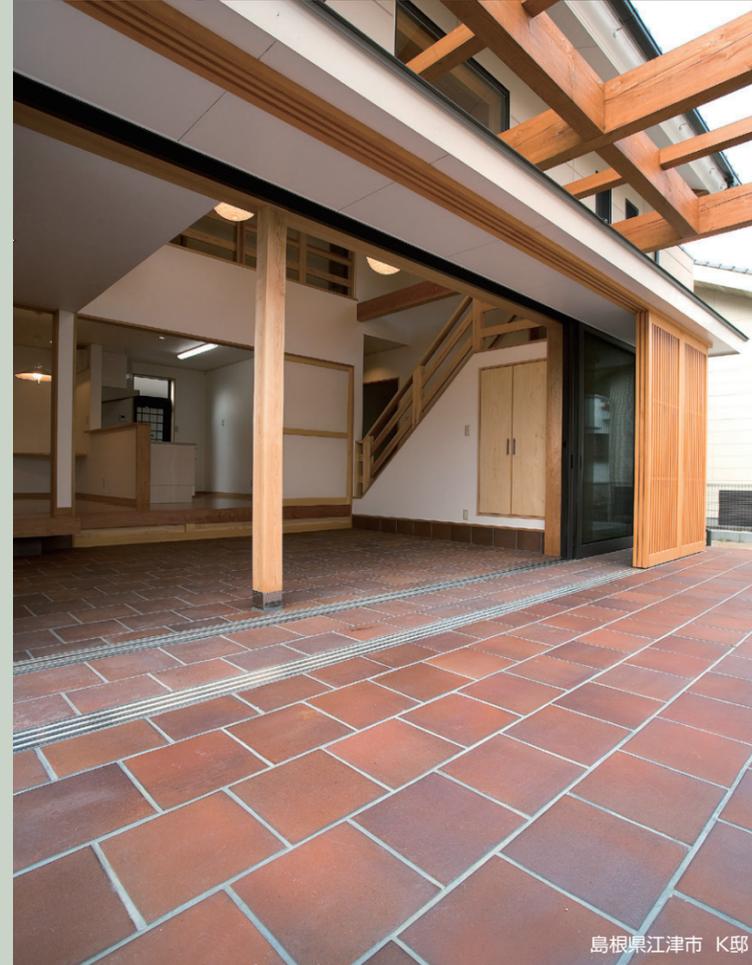
じっくりと焼き上げた後、窯出しへ。石州瓦の独特でツヤ感ある豊かな表情に仕上がっています。

「いらか」「瓦彩釉」の生産窯元 木村窯業所

木村窯業所は1931年創業。1979年登り窯からトンネル窯に移行し、登り窯の約30倍の大量生産が可能となり、石州瓦が島根西部の基幹産業に発展。1991年九州に発生した台風により、多くの屋根瓦の葺き替えが発生。強風対策を施した防災瓦を開発し、石州瓦は最盛期を迎える。

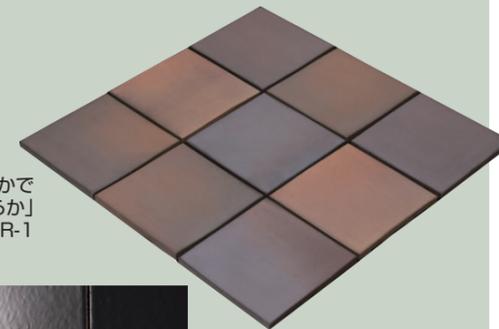
- 2000年 石州瓦業界で初めて窯変瓦の製造に着手
- 2004年 石州窯変敷瓦の製造を開始
- 2007年 「いらか」を商品化
- 2009年 「瓦彩釉(カワラサイユ)」を商品化

歴史ある石州瓦を現代建築にも応用できる優れた素材に。



屋根や外装壁はもちろん、インテリアまで幅広い利用が可能。

現代においては、瓦は屋根だけではなく、外装材やインテリアの材料としてもその利用価値が向上しつつあります。汚れにくく、お掃除しやすいという特性を最大限に活かした瓦は、建物の内から外をつなぐ床材の一つとして、広く活用されるようになってきました。ダイナワンでは、「いらか」や「瓦彩釉(カワラサイユ)」として、建物の内外に存在感を与えると同時に、唯一無二の存在を表現。焼きものの温もりと安らぎが伝わる空間を創り出しています。



焼きものらしい温かで懐かしい風合いの「いらか」 DN-285/IR-1



深い透明感をもつ釉薬の味わいが特長の「瓦彩釉(カワラサイユ)」 DN-285/AM-1

島根県江津市 K邸

# PICK UP POTTERY!

技に磨きをかけ続ける工房 vol.1

## ～ 泰青庵 ～ 岐阜県土岐市

伝統を受け継ぎ伝統を守る。  
守る事に囚われ過ぎず、受け継いだ伝統で現代を作る。  
それぞれの時代に表現する伝統。  
そんな思いで日々、作陶する窯元。



2016年ダイナワン新商品発表会ノベルティ



JIA主催学生創作茶席コンペ 2016年度協賛品

銀座連合会による「銀茶会」において、JIA主催学生創作茶席コンペで  
入選した4チームに贈られる記念品に採用されました。



泰青庵  
陶芸家  
**林 宏泰**  
Hayashi Hiroyasu

ろくろと手おこしで  
成形した白磁に絵付  
けをする美濃古染め  
焼きを得意とする。